幼児用の机と椅子について

山下俊郎

一

幼稚園や保育所で、幼児用の備品として用いられている机と椅子を見ると、まずその形が種々雑多であることが眼につ、。机では、長方形のものが一ばん多いことは多いが、その大きさにはいろいろの種類があり、形の上からいっても、そのほかに円形があり扇形があり、脚のつけ方を見てもまことに種々雑多なものがある。椅子について、一人掛けのものだけをとりあげても、いろいろの形のものがある。全体的にそうならば、机にしても椅子にしても、その形はなるべく単純な形で、しかも多面的な用途に耐える融通性に富んでいて、堅牢な大きなものがいいということが、一般的にはいえるであろう。あまりに特殊な工夫をこらしたようなものは、とかくその工夫のためによけいな制約を受けることになってあとで困ることが多いようである。

机と椅子については、もう一つ高さの問題がある、机と椅子の高さは、直接にこれを使っている幼児の姿勢に関連する。いい姿勢をとらせるようにするということを考えるならば、何としても幼児の身体発達にあわせた机と椅子を用意することが必要である。ところが実際に方々の幼稚園や保育所にいってみると、机や椅子の高さにはずいぶんといろいろのものがあって、うまく幼児に合っていないのではないかと思われるものが少なくない。

二

この幼児用の机と椅子にいろいろの問題があることをかね

がね感じていたわたくしたちは、昨年の夏休みに、東京家政大学の児童研究班の数人の学生に保育施設の机と椅子についての調査をやってみるようにすすめたので、学生達は直接に保育施設にいっていろいろの面から調査した。その中から、机と椅子の高さの結果だけをとりあげてここに紹介してみよう。

調査の対象になった施設は、東京都内で九園、地方では長野、静岡、広島、新潟、秋田の各県から十園である。この被調査園はいずれも学生の郷里であるとか、近くで便利な所というような条件で選んだものであるから、厳密なサンプリングによるものではない。したがって、いわば問題の所在を明らかにする程度の意味しかないであろう。机と椅子を用いている幼児の年令は、四才と五才とに限定してある。

三

まず机の高さを四才五才児に対して幾段階用意してあるかを見ると、少ない所は一種類しかないし、多い所は六種類にわたっている。

机の高さを、その寸法別に段階をわけて分布状態を見ると第一図のような結果になっている。また椅子の高さを同じようにして示すと、第二図のような結果になっている。この二つの図で見ると机にしても椅子にしても標準からのずれがいちじるしく、また、害にも色々の種類があることに気がつく。

四

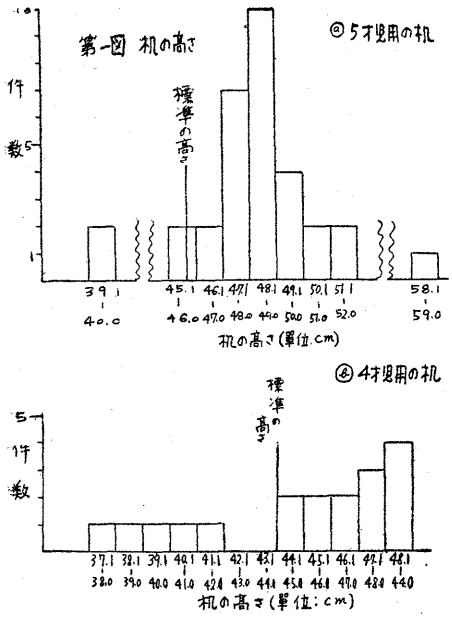
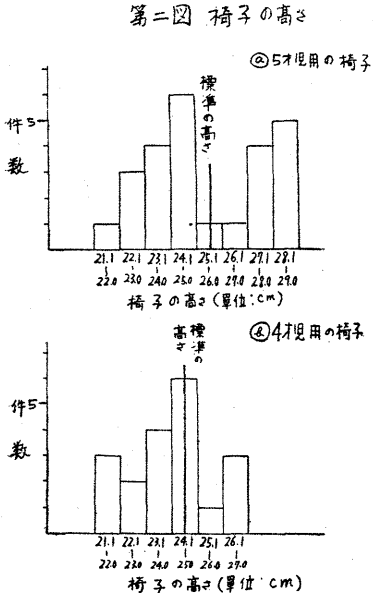
標準となるべき机の高さについては、豊田順爾氏の学童用机の座高三角法の方式がある。この方式によると

$$\text{机の高さ} = \frac{\text{座高}}{3} + \text{腰掛の高さ}$$

$$\text{腰掛の高さ} = \text{下腿長}$$

となっている。仮りに学童用の方式をそのまま幼児にあてはめて考察してみる。そこで、全国平均座高をこの式にあてはめて、計算すると、標準となる机の高さは五才児用四五・六三センチ、四才用四四・〇センチとなる。被調査園の身体検査記録によって座高の平均を出してみるとほぼ全国平均と等しくなっているので、次の数字は妥当だと思われるのである。下腿長は、全国的な数字がないので、身長、座高、体重がほぼ全国平均に近い幼児を各年令から十名づつ選び、調査して平均値を求めた所、五才児二五・五センチ、四才児二四・五センチとなった。したがって、これが標準となる椅子の高さであると考えられる。この机と椅子の標準寸法の当てはまる位置を第一図および第二図のそれぞれの所に示しておいた。

五

次の数字は一つの参考になると思うのであるが、全国的に測定して標準を出すことがわたくし達に課せられた課題であると思う。そして標準的な机と椅子の高さを定めることが課題である。さらにまた、ひとしく五才児とか四才児といっても個人差がいちじるしいのであるから、この個人差に応じて各年令別にどのくらいの段階を用意したらいいかということを考えることもえる重要な問題であろう。

（ここに資料として用いた調査を行ったのは、東京家政大学学生安達博子、金子久子、佐々木恵美子、新井友世、金原澄江の五名である。）